

2025年1月19日顕現後第2主日

イザヤ書62章1-5節

コリントの信徒への手紙一12章1-11節

ヨハネによる福音書2章1-11節

顕現後第二主日です。新しい聖書日課ですが、詩編のほか変更はありません。顕現後の節は、イエス様の生涯について学ぶ時ですが、本日は、ヨハネ福音書から学びます。ヨハネ福音書は、他の福音書と異なり、イエス様の活動について、明確な始まりを持ちません。ただし、「しるし」という表現を用いてその始まりを告げます。本日のお話はその最初の「しるし」です。

お話は、「三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。イエスとその弟子たちも婚礼に招かれた」（ヨハネ2:1-2）と唐突に始まります。何かの三日目が謎です。物語の流れでは、すぐ前の「フィリポとナタナエル、弟子になる」からですが、直接関係しているわけではなさそうです。場所はガリラヤのカナ（ナザレより北、ガリラヤ地方のほぼ中央）ですが、特に説明はありません。誰の結婚式かも不明です。結婚式は原則親しい人しか招かれないので、私的な場面といえます。この1~2節は、場面設定にすぎず、実際のお話は、ぶどう酒が足りなくなることから始まります。

そもそもヨハネ福音書は、物語の流れ（いわゆる起承転結）や、時代背景や地理的事柄との関係が不明確なことが多いのが特徴です。また、会話や出来事についても、登場人物同士の食い違いや思い違いが多いのも特徴です。それらはすべて、人間的なあらゆる理解を超えて、信仰へと導く、ただその目的だけで描かれているからです。そもそも「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」（ヨハネ1:1）という始まり自体が、人間的な事柄を超えた理解を求めています。

ここでも結婚式の描写は一切なく、お話自体は、「ぶどう酒がなくなってしまったとき、母がイエスに、『ぶどう酒がありません』と言った。イエスは母に言われた。『女よ、私とどんな関わりがあるのです。私の時はまだ来ていません。』」（ヨハネ2:3-4）とすぐに展開します。お話の展開の唐突さ、食い違っている会話（イエス様の母マリアに対する失礼な答え）、これら一つひとつについて、深く考えても、明確な答えは出ません。ただし、「最初のしるし」として、水がぶどう酒に変わる奇跡につながります。

この奇跡は、新約における他の奇跡（病気の癒しや悪霊追放、対自然的行動）に比べ、大変めずらしいと言われますが、注目すべきはその詳細ではありません。ヨハネ福音書が示そうとしている特徴は、この出来事を奇跡と呼ばずに「しるし」と呼んでいる点です。「しるし」とは、誰かに何かに気付かせる記号のことです。このお話の最後は、「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた」（ヨハネ2:11）となっており、「しるし」から何を見出して、何をすべきと促しているかを明確にします。それは「栄光」であり、「信じること」です。もちろん、その内容はイエス様をキリストと信じることですが、水から変わった大量のぶどう酒が、メシアの時代の豊かさを示し、結婚式という場面を通して、それが現実となったことを示しているのです。「言」が現実となったイエス様を信じましょうと促しているのでしょう。

そう促されても、謎ばかりで、すぐには信じられない。そうしてしまうのも仕方がないことで、次に続く2章13節からの「神殿から商人を追い出す」お話がその難しさを示します。その場面はエルサレムの神殿であり、出来事は神殿から証人

を追い出すという、公共の場所で起こります。その場面にいるユダヤ人たちは「しるし」を求め、イエス様が神殿再建を「しるし」として答えるのですが、彼らは理解出来ないのです。そこでは、神殿再建の「しるし」がイエス様の復活のことであり、弟子たちですらはっきりと信じるようになったのは復活の後であると記されています（ヨハネ 2:22）。登場人物である弟子たちでもすぐに信じられないのですから、時代も場所も異なる読者のわたしたちが、すぐに「しるし」を通して信じられないのも無理はないことです。しかし、その無理を簡単に超えて信じなさいと促しているのが、ヨハネ福音書なのです。また、「しるし」によって示されるイエスの「栄光」に、何を見出すかは、きわめて大切なことであるからです。

さきほどぶどう酒の豊かさが、旧約的にはメシア的な、終わりの時におこる豊かさの象徴と申しましたが、それも見出すべき事柄ではありません。また、「栄光」という言葉は、壮大な規模の何かを思い起こさせますが、それが示されたのは、名前も告げられていないある二人の「結婚式」でした。ただし、喜びである二人の歩みのはじまりは、ぶどう酒不足で少し残念なるかもしれないところでした。最初の「しるし」が示されたのは、そのような極めて私的で小さいこと（とっては二人に申し訳ないのですが）の解決を通してでした。その次のしるしは、公の場面（宗教的中心地）の大騒動でした。つまり、主なる神様は、イエス様を通して、私的な事柄においても、公の事柄においても、「しるし」によって「栄光」を現された、だから信じまじょうと促しているのです。

それは何かを理解することを停止して信じまじょうと、促しているわけではありません。「しるし」を受ける側、人間が根本的に新しくされることを求めているのです。どのような奇跡か、内容は何か、それを観察分析して信じるという姿では、不十分なのです。ここでは新しくされることは話題となっていませんが、続く3章にあるイエス様とニコデモとの会話がそれを示します。つまり、新しくされることと、信じることは、同じ意味なのです。イエス様の「しるし」は常識を超えているからです。

「しるし」を見て信じるとは、人間の常識を超えていて、人間を全く新しくする視点を持つ行為である、それがヨハネ福音書の示す信仰なのです。そのような視点をどのように持つことができるのか、それは祈りを通じた聖霊に働きによるというのが答えですが、本日の使徒書にもそのカギがあると思います。

本日の使徒書で、パウロは集まる人が様々な賜物を持ち、それゆえにまとまれないコリントの教会に対して、一人ひとりの霊の賜物と教会全体の関係について、勧めを語ります。「働きにはいろいろありますが、すべての人の中に働いてすべてをなさるのは同じ神です。7 一人一人に霊の働きが現れるのは、全体の益となるためです」（1コリ 12:6-7）この言葉は、一人ひとりの賜物が、単なる才能や能力、常識的であることを超えて、教会全体の益となることを求めています。なぜならば、それぞれの賜物は、その人のものですが、「同じ霊」の働きによるからです。教会は、主なる神様が集められた集いですから、その歩み力の源は同じなのです。それゆえにパウロは「しかし、これらすべてのことは、同じ一つの霊の働きであって、霊は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです」と結論付けられるのです。

イエス様は、きわめて私的な事柄でも「栄光」を現し「しるし」を示す方でした。すぐ後のお話では公の場面でも示されました。イエス様の示す「しるし」も、それが示される「時」も「場」も、人間の常識を超えています。その常識を超えた所から大切な視点が示されます。わたしたちが信じているのは、それを可能とされる方です。そのことを今年も確認して、歩み始めたいと思います。